主なる神に賛美と感謝を　詩篇 92:19-15	2021.7.25(文月)庄丘 NO.661 春日部福音自由教会　山田豊

表題を見ると、本詩篇は共に集う礼拝において用いられた賛美と思われます。コロナ禍にあって、多くの教会では様々な工夫をして礼拝を持っていることでしょう。残念ながら教会に集うことができないので、各家庭や個人で礼拝を守っておられるということもあるでしょう。たとい集まって礼拝をもっても、今までように声高らかに歌うことができず、礼拝では賛美が欠落してしまっているように思います。どのような礼拝をささげていくのかを考えるときに、この賛美をどうするかは大きな、そして大切な問題であると思います。

1－3節では、著者は、語順で言うと、主なる神に感謝をささげ、賛美をささげています。朝と夜、それぞれの時間に思いを巡らすことができます。礼拝においては、楽器を用いていたことが3節からは、楽器を用いて礼拝の賛美がささげられていたことが分かります。それぞれの国や地域にある楽器で賛美をするのは、良いことであると思います。琴はリラとも言われていますが、最近レイアーという楽器のあることを知りました。標準的には16本の弦が張られた木製のたて琴で、癒しのメロディーを奏でる楽器として用いられているようです。

4－9節には、賛美をささげる理由が歌われています。天地創造という神の御業、イスラエル民族を通して示された救いの御業が念頭にあるのでしょう。それは大きく、深いものです。その素晴らしさに唯驚嘆するだけでなく、そこに神の御業のあることを知らないものは、まぬけ者、愚か者と言われています。ちょっとびっくりしてしまいますね。私たちの人生もまた、神の業の現れです。どんなつらい中に置かれても、そこに神働きのあることを知ることができるのは、幸いであると思います。

10－15節には、主の庭で栄えることが詠われています。野牛の角は力を表し、ナツメヤシの木やレバノンの杉は、たくましく成長するさまを表します。神殿は確かに主の宮です。捕囚となっていた民が帰還し、神殿を建て、そこで神を賛美したという歴史がありました。今日に適応すれば、教会こそ主の庭であり、神を賛美し、成長して実を結ぶところです。また、キリスト者一人一人も聖霊の宮ですから、その交わりの中で、成長することができます。使徒1:8にあるように、主イエス昇天の後は、聖霊が与えられて力を受けたのでした。このようなことを通して、私たちは神の真実さを証しする者となったのです。

2テモテ2:13

私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である。ご自分を否むことができないからである。」

引用聖句

詩篇 14:1　愚か者は心の中で「神はいない」と言う。彼らは腐っていて忌まわしいことを行う。善を行う者はいない。

使徒 1:8　しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

2 テモテ 2:13　私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である。ご自分を否むことができないからである。」

ファニー・クロスビー（Fanny Crosby）1820.3.24 – 1915.2.15

米国の詩人、賛美歌作詞家。ニューヨーク州パットナム郡生まれ。生後 6 週間で盲目となり、11 歳の時にニューヨーク市立盲学院に入学。1847 年から同学院の教師となり、英語と歴史を教える。1858 年盲目の音楽家アレクザーンダ・バン・アルスタイン（Alexande Van Alstyne）と結婚。生涯 3000 曲以上の賛美歌を生み出し、D.サンキ・ドエインとの共作も数々手掛け、「主の腕に抱かれ」(一般的には”イエスのみ腕にいこう”」)、「神に栄光」等を残す。（Hymns for Japan）新聖歌には最多 24 曲がある。